

## “フェース・トゥ・フェース”の交流で中国理解を深める

(公社)日中友好協会派遣の「日中友好大学生訪中団第3陣」(一行106人、団長=宇都宮徳一郎副会長)が2015年12月2日から8日まで北京、杭州、上海を訪れた。各地で同世代の中国人の学生と交流し、自らの目で中国を見て体感した。

訪中団は全国から選抜された大学生98人を中心に編成。駐日中国大使館と準備を進め、中日友好協会が受け入れた。出発前日には、中国大使館での事前研修と壮行会が開かれ、程永華大使から「情報化が進み、すでに様々な報道で中国のことは見聞きしていると思うが、自らの目で中国を見て感じてほしい」との期待が寄せられた。

北京では直前の報道で懸念されていた大気汚染が嘘のように晴れあがった。3日は万里の長城と故宮を参観、夜は貴賓楼飯店で歓迎会が催され、謝元・中国人民対外友好協会副会長が「中国の大学生とのフェース・トゥ・フェースの交流を通じて友好を深め、真実の中国を感じてほしい」と激励した。また、石飛節・在中国日本国大使館参事官からは「日本国内の中国に関する報道はほんの一部分で、実際に訪れてみないと相手の国は理解できない」との話があった。

浙江省杭州市では浙江工商大学と杭州師範大学の2校での交流活動と、杭州の歴史文物を紹介した博物館、世界遺産である西湖の遊覧の日程が組まれた。

5日に訪れた浙江工商大学では歓迎会が催され、戴文戦・副校長が同校の紹介と過去の実績を交え日本との交流を重視していることを説明した。呉曉東・浙江省人民対外友好協会副秘書長からは学生交流へ期待が述べられた。その後、中国側から漢服の紹介、日本側から2つのパフォーマンスが披露され、歓迎会に花を添えた。

続く杭州師範大学では、班ごとに部屋に分かれて学生同士の直接交流が行われた。交流では漢服の切り紙工作を通じて漢民族の文化が紹介され、日中両国の学生が共に手を動かす楽しいひと時となった。また学生食堂での昼食交流も行われ、貴重な体験となった。

一方、杭州環球博物館や歴史博物館、傘刀剪劍博物館などでは、ガイドの説明を聞きながら中国の歴史や文化の深さに驚き、感嘆の声を上げた。世界遺産である西湖の遊覧では一元札の裏の景色を生で見て、南宋の文化に思いをはせた。

7日夜の歓送宴会では陳愛珍・浙江省人民対外友好協会専職副会長から、心と心の交流を通じて育まれた友好の種が、子々孫々にわたる友好をもたらす将来への希望が語られたほか、各班の代表がそれぞれ感想を述べた。

短期間だったが、内容の濃い交流と参観をこなすことができた。これも学生たちの目的意識の高さの表れであり、日中友好の明るい未来を予感させる意義深い訪中団であった。宇都宮団長は「先入観のない新しい気持ちで今の中国を見ることが重要だった。今回の交流は草の根交流の重要な一歩となることを確信している」と語った。

(報告:岐阜県日中友好協会 鈴木高啓事務局長)



東京音頭を踊って交流する  
日中の学生と関係者  
(6日歓送会)



交流学生との記念撮影  
(4日浙江工商大学)



日中双方の学生で漢服切り紙の制作  
(5日杭州師範大学)



晴れ上がった空の下で故宮見学  
(3日北京)



日中共同での司会 (3日歓迎会)



日本側学生によるパフォーマンス  
(6日歓送会)